

この五言律、題して「舟ヲ館島(屋形島)ニ泛グ」となっているが、作者の松下筑陰は筑後久留米の生まれ、日田に家塾を潤いて玄瀬渡窓の幼学の師であつた。招かれ佐伯に来て藩主毛利高操の寵遇を得、藩学四教堂の教諭の基礎を据えた人である。

この詩の第六句に「珠ハ海岸ノ紅ニ生ズ」とあるが、一体これは何を指しているのであるか。漁師のもつ海鏡(四角な箱目鏡)によつて、今のサンゴ礁の色彩を、当時の文人達も觀賞していたのではあるまいか。

さらに、有名な「蒲江八景」の中にあげられている、屋形島を詠んだ漢詩と和歌を掲げてみよう。

館島

古川 龜

秋潮何渺々

蘆荻月蒼々

半夜雁声集

長天月似霜

秋潮何ぞ渺々たる、芦荻秋月に蒼々たり。半夜の雁声集まり、長天の月似霜に似たり。

(この作者古川龜は佐伯藩士、外不明)

橋迫春菰

秋毎に落ちくる雁は屋形島

名をたのみにて宿るなるらん

(橋迫春菰は土所明神社の祠官、慶応三年歿六十二才、河学者)

次に、現存の方の屋形島の短歌と、俳句とお目につけよう。大内女史は佐伯市葛原にお住居なさる、郷土の代表歌人、その著作歌集「花かた」から二首。俳句はこの日同行した羽柴氏の即興吟である。

大内須藤子

海底のグラスを透きいきはやかに珊瑚礁

見えコバルトスズメ泳ぐ

わが父祖の馬も育ちし屋形島渚に白き菖き  
貝拾ふ  
龍 川

洪水綿の群落ことごとく花咲きて  
十のゆすす洪水粒島中はるか

屋形島は、日豊海岸国立公園中の観光のメッカとなるであらう。広い地域にわたる洪水綿の群落、島に連なる岩礁や小島など、それらは開發されるに違いない。この天然の自然美が、都市的に觀光化されてるとき、美しい自然を破壊しないように、よくよく心して貫わなくてはならない。屋形島は蒲江町を後にして、他郷で働いている数多くの人々の、母のような魂のふるさとでもある。屋形島を後に、蒲江に帰る船の中から、次第に遠ざかる島をなつかしむ、島の人達の生活の幸を祈った。一行は船の上で、なお屋形島の洪水綿とたたえながら、賑やかに語り合う時とまへることが出来た。(おわり)

初 秋 羽 柴 龍 川

行く道のまだ陽の暑き御所が谷  
石積みの奇しくも巨き、神籠石

法螺貝を吹く人影はなし英考の山  
阿蘇久住望めど遠し 秋がすみ

御許山巨杉のほとの花は若荷  
道のべに白木萱咲く三軒屋